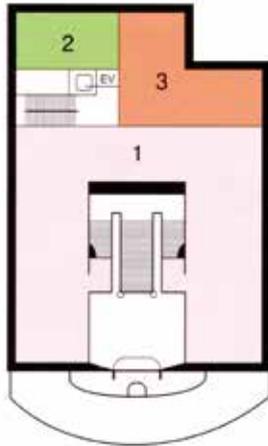


白山市文化施設館報

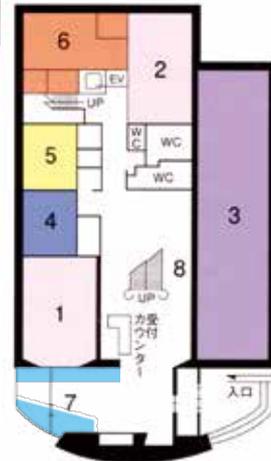
白山ミュージアム



- 2F
1. 常設展示室 (2)
 2. 研修室
 3. 管理スペース



隅谷正峯



- 1F
1. 隅谷正峯展示室 (常設 1)
 2. 壁画展示室 (常設 3)
 3. 特別展示室
 4. 資料室
 5. 事務室
 6. 管理スペース
 7. ジオパークコーナー
 8. てつどうの広場

研修室

講習会、学習会等を開催します。

特別展示室

特別のテーマにもとづいて、一定期間行う展示を、年間数回開催します。

白山市立博物館に

ジオパークコーナー開設

当館は、昭和六十三年八月三日に開館した松任市立博物館を前身としています。平成十七年二月、白山市発足に伴い、白山市立松任博物館と改称し、さらに平成二十五年四月、鶴来博物館との統合により、白山市立博物館に名称変更しています。

旧松任市辰巳町出身で、人間国宝であった故隅谷正峯氏の刀剣や制作過程のジオラマ展示をはじめ、郷土の先人たちの業績、国指定史跡東大寺領横江荘遺跡荘家跡の復元模型や農村の様子などを展示しており、芸術・文化に貢献する文化施設として、広く市民に親しまれています。

開館三十一年目を迎えた令和元年には、一部をリニューアルし、白山手取川ジオパークの「海と扇状地のエリア」の拠点の一つとして、ジオパークコーナーをロビーに開設いたしました。

(関連記事 二ページ)

contents

■ 白山市立博物館 ジオパークコーナー開設	1	■ 西のぼる画業40周年記念展	7
■ 桑島化石壁-白山手取川ジオパークの土台-	2	■ 白山市立博物館 企画展 原峯水彩画作品展	8
■ 奈良県からの手紙 ヒロセ式脱穀機	3	■ 令和2年度 前期行事予定等	9
■ 相良氏法度にみる一向宗	4	■ 令和2年度 文化施設展示・行事予定等	10
■ 中川一政と万葉集 -画家の底流をなす詩歌の心-	5		

桑島化石壁 — 白山手取川ジオパークの土台 —



桑島化石壁（国指定天然記念物）

博物館ロビーに設置されたジオパークコーナーでは、「白山手取川ジオパーク」のテーマの一つとなっている「石の旅」をキーワードに、手取層群のいろいろな石と化石を展示しています。ロビー壁面では、白山市桑島地内の「桑島化石壁」を紹介しています。この「桑島化石壁」の地質学的価値が見出されるきっかけをつくったのが、ドイツ

の地理学者ライン博士です。明治七年（一八七四年）に石川県を訪れたライン博士が、信仰の山として名高い白山に登山し、その帰り道に、桑島集落付近で植物化石を採取し持ち帰りました。その化石が、のちにライン博士の友人である植物学者のガイラー博士によってジュラ紀中期（現在は白亜紀前期のものであると考えられている）の植物化石であると論文発表されたことから、日本で初めて化石によって地質年代が確かめられることとなったのです。その後は、日本を代表する中生代の地層（手取層群）として、多くの研究者によって調査が行われるようになりました。一九五〇年代には、東京大学の小林貞一教授が桑島や白峰を調査に訪れ、地元で化石壁と呼ばれている露頭（崖）に多数の植物化石を

発見します。中には立木のまま保存された化石林をなすものもあり、小林教授は学術的価値が非常に高いものであると判断し、天然記念物にすることを提案しました。そうして、昭和三十二年（一九五七年）に「手取川流域の珪化木産地」として、国指定天然記念物となったのです。その二十五年後の昭和五十七年（一九八二年）に、恐竜の化石が発見されました。この出来事により、手取層群から恐竜化石が見つかることが証明され、手取層群が分布している各県で、恐竜化石の発掘調査が行われるようになるのです。この地域の地層には、約三億年前から現在に至る時代の変化が刻まれています。様々な種類の地層が白山手取川ジオパークの土台になっているのです。

ジオカード （ジオパーク公式カード）

博物館に入館（入館料 一般二〇〇円・高校生一〇〇円・中学生以下無料）すると、配布を希望された方に白山手取川ジオパークの「ジオカード」を一人一枚、さらに「ジオカードコレクションブック」を希望された方に一人一冊お渡ししています。



「白山手取川ジオパーク」ジオカード

奈良県からの手紙 ヒロセ式脱穀機

令和元年十二月に、奈良県の宇陀市室生に住んでいらつしやる方から、脱穀機の写真とともにお手紙をいただきました。お手紙には古い「稲こき機」が保存されており、「北陸線美川驛前 ヒロセ製作所」と記入があると書かれていました。そこから、JRの時刻表から北陸本線に美川駅があることを調べられ、白山市のホームページまでたどり着いたそうです。

この脱穀機を発明したのは、美川町で明治二十四年に生まれた廣瀬與吉でした。鍛冶屋の長男に生まれた與吉は機械いじりが大好きでした。美川町尋常小学校高等科を卒業後、家業に従事しながら、明治四十四年、県立工業高校補修科を卒業します。二十二歳になると京都市の織物工場に採用され、機械の改良を任され

ます。大正七年までの六年間に特許三件、実用新案が八件登録されました。機械は工場で採用したばかりでなく、販売も行うと注文が殺到しました。事業は順調でしたが、まもなく「世界大恐慌」が起こり、ついに工場を閉鎖することになりました。それでもあきらめず巴製作所と言う工場を発明を進めますが、経営はうまくいきませんでした。その時、以前に鋏の改良を考えていたこと思い出します。



送られてきた脱穀機の写真

その当時の回転脱穀機は不完全なもので農家の人達からも不便だと言われていました。そこで、與吉は回転脱穀機を改良し、大正九年に特許を獲得しました。お手紙で紹介されていた脱穀機が、廣瀬與吉の農機具第一号として発明されたものと同じでした。

昭和七年には京都工場を閉鎖し、郷里である美川町の廣瀬製作所で農機具の開発を進めます。昭和十一年には日本で初めて人が耕すのと同じクランク式の自動耕運機を発明します。国内はもとより、中国や朝鮮方面にまで出荷されました。

巨万の富を手にした與吉は、自分の事業ばかりではなく、地元の為に、小学校の児童が海で亡くなったと聞いて、不憫に思いプールを寄贈しました。他にも火見槽、「今町の台車の鳥居」などを寄贈します。町民は「廣瀬の大将」と親しみをこめて呼んでいました。

廣瀬與吉は昭和十九年に五十九歳で惜しまれながら、生涯を閉じました。死後は、右腕と頼りにしていた工場長達も相次いで他界し、製作所は昭和三十年に閉鎖されました。

残念ながら、與吉が寄贈したプールも、火見槽も町には残っていません。地元にも與吉に関する品を見る機会が少ない今、遠い奈良県から知りたいたい方がいらつしやったことに驚くとともに嬉しく感じました。

この機会に廣瀬與吉という素晴らしい発明家がいいたことを紹介させていただきます。

(石川ルート交流館 早松)

相良氏法度にみる一向宗

分国法ぶんこくほうで知られる相良氏法度さからしほつとは九

三十五条「他方より来り候する

はふり（祝ハ巫女）、山ふし（山伏）、

物志り（陰陽師）、屋ど（宿）をか

が領国統治のために出した独自の法

すべからず候、祈念等あつらへぶか

令です。相良為統七条、長毎十三条

らず、一向宗の基ひたるべく候」他

と晴広二十一条からなる四十一条を

国からくる彼らに宿を貸すなど戒め

相良法度といえます。晴広法には

ています。一向宗をどのように見て

三十五条・三十六条・三十七条と一

いたかがわかります。

向一揆が言及されています。なかで

三十六条「一向宗之事、いよいよ

も三十六条「加賀の白山燃え候」と

法度たるべく候、すでに加賀の白山

始まる文言は目を惹きます。

燃え候」とはちょうどそのころ白山

この文書は白山開山一三〇〇年

が噴火していた（『日本災異志』噴

記念の小さな展示として紹介しまし

火之部に「天文二十三年五月 加賀

た。所蔵する慶応大学の許可を得て

白山噴火」と記載される）ことが九

パネル制作し歴史館に展示したもの

州にまでも聞こえていたことがよく

です。晴広は天文二十四年（弘治元

わかります。晴広は加賀一向一揆が

一五五五年）二月、二十一カ条を追

盛んであったこと、さらに越前朝倉

加し分国法を制定しました。

氏と加賀一向一揆が国境をまたぎ激

それでは一向宗と一向一揆に言及

戦中であった（天文弘治の戦い）こ

する件の三条を見てみましょう。

とを聞いていたものでしょうか。白

山の噴火は、心の救済を求め国家安
 穏・五穀豊穰を言わない一向宗に、
 白山権現が怒ったと受け止めてい
 ます。

三十七条「男女によらず、志らふ

と（素人）の祈念薬師取りいたし、

みな一向宗と心得べき事」といいま

す。加持祈祷の治療を行う者は一向

宗と決めつけます。少なからず山伏

や巫女と見られていたようですが、

真宗門徒には中世医療知識が知られ

ていたと思われます。

白山は頂上付近では温泉が湧いて

いたことが知られます。『光曜山岷

江記』によれば、飛騨高山照蓮寺十

世明心が石徹白の神司

らを連れ白山に登り、

山頂付近の池を眺め「温

泉湧あかり沸湯鎮にほ

とはしる。是白山第一

の地獄なり」と云い、「阿

鼻の釜か」とあやしん

だと伝えられます。明

心は多くの奇瑞譚によって今泰澄大
 師と飛騨の民から慕われていたそ
 うです。ここに述べられる一向宗は
 白山権現の修験僧の姿にも見えます。

雑行雑修を戒める蓮如さんがこれを

聞いたら驚いたかもしれませんね。

かくて九州戦国大名肥後相良氏領

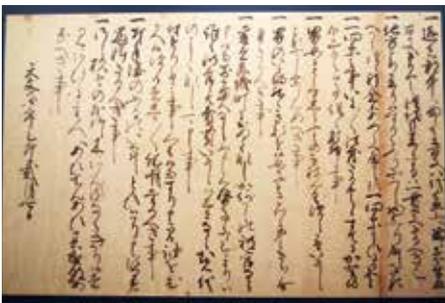
内では、薩摩島津家と同様、明治ま

で一向宗は「法度たるべく候」と禁

教とされますが、信仰は隠れ念仏と

して続いたようです。

（鳥越一向一揆歴史館 西出）



中川一政と万葉集

— 画家の底流をなす詩歌の心 —

はじめに

新元号「令和」の時代を迎え、その典拠である「万葉集」にも関心が集まりました。「万葉集」は、奈良時代末頃までに編まれたわが国最古の歌集で、その特徴は、おおらかで写生的、また、素朴な力強さを感じさせる歌が多いとされます。

さて、中川一政（一八九三—一九九二）が少年期から親しんでいた歌集もこの「万葉集」です。本稿では、画家・中川一政を知る上で欠くことのできない、彼が生涯持ち続けた「詩歌の心」について万葉集を端緒として紹介します。

歌との出会いと別れ

東京に生まれ育った中川一政は、本郷の誠之尋常高等小学校から、神

田錦町の錦城中学校へ進みます。与

謝野晶子の歌を論じた作文で錦城中学に及第した一政は、学校創立三十年周年祝賀歌の公募で採用されたことを機縁に回覧雑誌の仲間に加わり、後の歌人・富田碎花と親交を持ちます。また、富田を通じて斎藤茂吉や若山牧水らの知遇を得るようになります。

こうしたなか、一政は自然と「万葉集」を読むようになり、同時に自らも歌を詠むようになったと言います（『中学時代』『腹の虫』一九七五年 日本経済新聞社）。当時の新聞や雑誌に投稿された一政の歌は、与謝野晶子や若山牧水に選ばれ、誌面にその名を残しています。一例に、与謝野晶子撰歌集『白光』（下図版）に載った一政十四歳の歌を紹介し

城のもと月光ほのにさす時を
鬮の散ると見る黒き海

砂染める街の柳に遠火事の
ひかりにほひぬゆふぐれの霧

少年の歌としては暗鬱とした空気を感ぜさせながらも、光と影の世界が立ち上がるような描写です。この頃に相次いで母や姉を病気で亡くしたことも、一政を詩歌に向わせる一因になったと思われます。一政はその後も、二十代にかけて歌だけでなく、短編小説や詩を新聞や『早稲田文學』など文芸誌に発表し、世に「詩人」として知られるようになります。当時、有島武郎（小説家・一八七八—一九二三）や谷川徹三（哲学者・一八九五—一九八九）らが一政の詩を愛読していました。

とはいっても、一政自身は二十歳前後の頃、文学で身を立てることは考えられず、生きる道を思いあぐねていました。そんな時、知人から油絵具一式を贈られたことが転機と



与謝野晶子撰歌集『白光』
1908年 新潮社（個人蔵）

なります。その絵具で二十一歳の時描いた処女作「酒倉」（一九一四年）が異画会で岸田劉生（一八九一—一九二九）に認められ入選し、一政は画の道を歩み出します。この頃の作品には、穏やかな詩情を湛えた風景画や静物画が残されていますが、直向きに写生を繰り返すことで画家の道に進んでいく一方、次第に詩歌とは距離をおくようになります。

歌集『雨過天晴』を刊行

しかし、少年期から舌頭千転した万葉の歌は一政の生涯に通奏低音のように響き続け、折にふれ歌を詠みます。旅先の風景に心動かされたとき、親となった喜びをかみしめると

き、妻の病に心引き裂かれるとき、そんな日々の、人生の折々に歌が生まれていきます。

大江山生野を過ぎてわがくれば
津々浦々のしづかなる午後

うららかに桃の花咲く裏畑
娘いだきてめぐる日となる

われひとり世に残らむは
まはだかになりて群集の中に
立つ如し

これらの歌を集めた歌集『雨過天晴』（一九七九年 求龍堂）には四〇五首が収められ一政の歌人の顔をうかがい知ることができます。写生的、また、銜いなく心情を真直ぐ

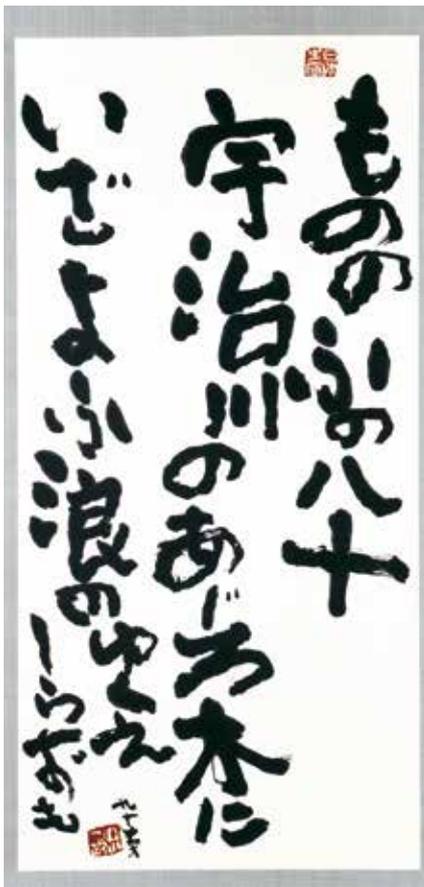
に表現した歌が見受けられ、まさに万葉調といえます。

一政は七十歳代半ばから書にも精力的に取り組むようになりますが、このとき中国の漢詩や芭蕉の言葉などと共にテーマとなっているのが「万葉集」の歌です。

歌の世界を思い描きながらしたためるといふ書は、万葉歌の大らかな調べを生き生きと表現しています。

宮中歌会始の召人に

一九六一（昭和三十六）年の宮中歌会始の召人に選ばれた一政は、次の召歌（御題「若」）を詠進しています。



中川一政「ものものふの」
万葉集より 1989年

わかき日は馬上に過ぎぬ
残る世を楽ししまむと云ひし
伊達の政宗あはれ

この歌は、伊達政宗の漢詩（馬上少年過／世平白髪多／残軀天所赦／不樂復（是）如何：馬上少年過／世平らかにして白髪多し／残軀天の赦すところ／楽しまずしてまた（これ）如何せん）を本歌にしています。戦国武将の生き様に心を寄せたストレートな詠いぶりが一政らしく、音読して味わうと分かるように、下の句の大幅な字余りが結句「あわれ」を引き立てて秀逸です。

一政芸術の通奏低音

— 詩歌の心

こうした中川一政が持ち続けた歌詠みの心は、彼の絵画や書などの作品の根底に息づいています。精密な描写ではなく、力強く生きた表現の追求を重ねた一政は、自身の画業の

ベースに詩歌があることを自覚します。

私は十三、四から歌をつくっていた。二十すぎる頃になつて詩をつくつた。

画をかくようになって歌にも詩にも遠ざかったが、今思うとそれが私の画業の発足であつたと思う。

私は詩や歌をつくっているうちに、間を覚え、構図を覚え、ムーヴマン（註）を覚えた。

（ぶつかり稽古六「腹の虫」前掲）

（註…主に絵画表現における動勢のこと）
私はこの頃になつて見えな
い世界が問題になつて来た。

香を嗅ぐとはいわないそうだ。香を聞くというそう

詩も短歌も俳句も読むものではなく、心のどこかで聞くものである。（中略）

見えない世界は詩歌では言葉と言葉の間にあり、絵画で

いえば形と色の間にある。

その見えないものをかくのが絵画の第一義であろうと考える。

私は今になって考えるとき、年時代、詩歌になじんで少しずつこの見えない世界を会得したものとみえる。(中略)

私は画かきだが、詩歌の世界からなお率直に画のことを教えられたと思う。

(「見えない世界」「見えない世界」)

一九五四年 筑摩書房)

アカデミツクな技術に拠らず独自の画法の模索を続けた中川一政にとって、詩歌の世界は、描こう

とする対象の表層ではなく、対象を見つめることで浮かび上がってくるリズムや間、動勢、また自身の感動といった見えないものを表現することへと彼を導いたものと言えるでしょう。一政の絵画作品、例えば初期の画面世界に誘うような風景画を観るとき、あるいは、

晩年の「薔薇」の鮮やかな色彩や躍動感豊かな筆致を観るとき、その形象の間に息づく詩歌の心が感じられたなら、中川一政の描くこととしたものにもう一歩近づくことができるのではないのでしょうか。

(松任中川一政記念美術館 徳井)

西のぼる画業四十周年記念展

西のぼるのしごと — 美への巡礼 —

会期 令和元年九月七日〜十月二十七日

西のぼるの画業

日本を代表する挿絵画家の一人、西のぼる氏が中央デビューしたのは、一九七九(昭和五十四)年に講談社小説現代連載の『怨霊孕む』(西村寿行著)で、以後、池波正太郎、平岩弓枝、北方謙三、安部龍太郎といった、日本を代表する作家たちの小説の挿絵や装幀画を数多く手掛け

てきました。特に歴史・時代小説における緻密な時代考証、繊細で余情溢れる筆致は、その人柄と相まって、文学ファンのみならず多くの作家たちからの絶大な支持を得ています。近年では『等伯』(安部龍太郎著)や『魂の沃野』(北方謙三著)などの挿絵を手掛けていて、現在でも斯界の第一人者であることは、広く衆目の一致するところであります。

西のぼるの風景画

デビューした昭和から、平成、そして令和へと時代は移り、画業の大きな節目となる年に開催された今回の記念展では、氏が近年精力的に取り組んできた「風景画」を中心に、計四十六点もの作品を展示しました。展示を通して、これまで広く定着してきた「挿絵画家」とは一線を画す、西のぼるが目指す新たな画境、そしてその心境を紹介し、来場者の好評を得ました。

(千代女の里俳句館 山下)



万両 (2019年西のぼる描き下ろし)



英虞湾の絶景 (2015年「半島をゆく」)

白山市立博物館 企画展 原 峯水 染色作品展

会期 令和二年二月七日～四月五日

白山市八田中町出身の日展評議員・現代工芸美術家協会理事として活躍した染色工芸作家 原峯水を紹介する展覧会を開催しています。

原峯水は、昭和から平成にかけて活躍した染色工芸作家です。今回は、平成十七年に開催した白山市立松任博物館での企画展「風音」原峯水作品展以来、約十五年ぶりの展覧会となりました。

峯水は大正十年に生まれ、昭和十七年に現役兵として太平洋戦争に参加し南方戦線にて終戦を迎え、復

員後間もなく長兄の病死により家業の農家を継ぐことになりました。加賀友禪の巨匠木村雨山（のちに人間国宝）に師事し、「二足の草鞋を履く」

時間的制約の中から三十代になってようやくスタートした遅咲きの作家人生でした。そのハンデを克服するため、加賀友禪の染色技術を習得しながらも伝統工芸の道を選ばず、洋画家がキャンバスを使うように屏風やパネルを用い、染色によって絵画的表現を展開する道を選んだのです。

そのごん新たな試みが日展で認められ、連続入選を果たし、やがて特選を三年間に二度も受賞するという快挙を成し遂げました。平成三年の日

本現代工芸美術展では最高賞の内閣総理大臣賞を受賞するなど、その作品に対する評価は国内ではきわめて



原 峯水 東雲（染色パネル）

原 峯水 略 歴

- 大正 10 (1921) 年 9月13日石川県石川郡旭村八田中町(現白山市八田中町)に生まれる
- 昭和 12 (1937) 年 京都の八野耕先生の下へ内弟子として入門、以後3ヶ年染色技術を習得
- 昭和 17 (1942) 年 現役兵として太平洋戦争に参加、南方戦線(フィリピン)にて終戦を迎える
- 昭和 21 (1946) 年 復員後間もなく兄が他界、やむなく農業に従事するも染工芸の道を探索する
- 昭和 23 (1948) 年 木村雨山先生に師事
- 昭和 28 (1953) 年 第9回石川県現代美術展《七面鳥》初入選、以後連続入選
- 昭和 35 (1960) 年 第3回新日展《夕映》初入選、以後連続入選
入選記念に雨山先生に「峯水」の号を受く
- 昭和 44 (1969) 年 第55回光風会展《想》初入選、以後第61回まで出品
- 昭和 45 (1970) 年 第56回光風会展《光影》工芸賞
- 昭和 46 (1971) 年 光風会会友推挙
- 昭和 47 (1972) 年 第11回日本現代工芸美術展《幻覚》初入選、以後連続入選
- 昭和 48 (1973) 年 第59回光風会展《追想》会友賞
- 昭和 49 (1974) 年 光風会会員推挙
- 昭和 50 (1975) 年 第7回改組日展《轟》特選第1席
- 昭和 51 (1976) 年 第8回改組日展《波に映く》特選
- 昭和 52 (1977) 年 第9回改組日展《北湖旅情》無鑑査出品、現代工芸美術家協会会員推挙
- 昭和 53 (1978) 年 第10回改組日展《杜の幻想》特選
《波に映く》石川県立美術館買上
現代工芸美術家協会評議員に就任
第17回日本現代工芸美術展審査員に就任
- 昭和 54 (1979) 年 第11回改組日展《たそがれの島》無鑑査出品
- 昭和 55 (1980) 年 日展委嘱推挙
第12回改組日展《満潮に映く》委嘱出品、松任市買上
- 昭和 56 (1981) 年 第13回改組日展《遙かなる幻想》委嘱出品
松任市文化産業賞を受賞
松任市無形文化財に認定を受く
- 昭和 57 (1982) 年 第14回改組日展審査員に就任
- 昭和 58 (1983) 年 日展会員に就任
- 昭和 60 (1985) 年 第17回改組日展《幾山河》会員賞受賞
- 昭和 62 (1987) 年 第19回改組日展審査員に就任
- 平成 2 (1990) 年 第22回改組日展審査員に就任
- 平成 3 (1991) 年 第30回日本現代工芸美術展《月と陰》内閣総理大臣賞受賞
第45回北國文化賞を受賞
- 平成 4 (1992) 年 日展評議員に就任、石川県文化功労賞を受賞
松任市立博物館に於て展覧会開催、現代工芸美術家協会理事に就任
- 平成 8 (1996) 年 『原峯水染作品集 野を行く』発刊、松任市立博物館に於て展覧会開催
- 平成 17 (2005) 年 白山市立松任博物館に於て企画展「風音」原峯水作品展を開催
- 平成 23 (2011) 年 1月21日逝去
- 令和 2 (2020) 年 白山市立博物館で企画展「原峯水染色作品展」を開催

高いものとなっていきました。また、受賞した作品ごとに峯水の作風は新たな展開を見せており、現状に満足せず常に一段上を目指す向上心と探求心がうかがえます。たゆまぬ研鑽のもと、目をみはる新たな作品群を幾度となく世に送り出してきました。その作品は、人間の情念の深奥にせまり、あるいは、自然の発する光輝に溢れ、また、聖夜に瞑想の扉を開き一人田園を行くが如く孤高の道を歩んだ峯水の、高潔な人柄を映し出して余りあるものと言えます。今回の展覧会では、白山市が所蔵する色彩にあふれたパネルや屏風を展示しています。訪れた人たちは幻想的な染色の世界を堪能していただきます。

（白山市立博物館 西）

白山市立博物館 企画展
梶野玄山 ― 花鳥山水画の世界 ―

令和2年4月24日(金)～6月21日(日)

梶野玄山は、明治元年に現在の白山市西新町で生まれました。幼少の頃より祖父に絵画を学び、小学校卒業後、四条派の垣内右隣に師事し、同三十一年には京都に赴き鈴木松年の門に入りました。

玄山は、円山四条派の伝統的写生を基本に、彩色豊かな独自の画風を開き、多くの優れた作品を残しています。

今回の企画展では、玄山が得意とした孔雀画や山水画を中心に、繊細かつ華麗な作品を紹介します。

松任中川一政記念美術館
特別企画 所蔵全作品公開展Ⅰ期
百花撩乱 ― 薔薇作品を中心に ―

令和2年3月3日(火)～5月31日(日)

令和元年度、美術館の新たなコレクションとして中川一政作品及び資

料28点の寄附がありました。これを

記念し、令和2年度は新収蔵作品を含め現在館が所蔵する全ての作品を

4期に分け展覧します。

第Ⅰ期は「百花撩乱」と題して、薔薇や向日葵、椿など花を描いた作品を中心に、前期(4月19日(日))、後期(4月21日(火))に分けて紹介します。併せて、「松任・相川新の風景」(1915年)など、当地ゆかりの貴重な初期作品も展覧公開いたします。



中川一政「松任・相川新の風景」1915年

石川ルーツ交流館
篠笛コンサート

令和2年4月12日(日) 午後2時～

16回目となります。八木繁さんと粋音会による日本の情緒あふれる名曲を篠笛の演奏でお楽しみいただけます。

呉竹文庫春季展
「歌を綴る」

令和2年2月18日(火)～5月31日(日)

創設者である熊田源太郎が親しんだ和歌の雑誌『こころの花』、『すみれ』を中心に季節に合わせた掛け軸を展示いたします。

千代女の里俳句館 企画展
令和の写真と俳句展

令和2年6月13日(土)～8月10日(日)

新しく令和の年を迎え、元号「令和」をテーマにした写真と俳句を組み合わせた作品を展示するほか、恒

例となった松任写真同好会員が撮影した写真への投句コーナーを設け、気軽に俳句を体験できます。

石川ルーツ交流館
令和元年度寄贈品について

昨年7月に、白山市在住の方からこれまで代々保管されていた銭屋五兵衛の孫、千賀愛用の硯箱、手鏡を含む北前船ゆかりの品十数点を寄贈いただきました。

美川町が本吉村と言われ、北前船の寄港地として栄えていた事を教えてくれる大切な品です。

昨年、ミニ展示寄贈記念展を開催いたしました。これからも定期的に展示公開する予定です。



令和2年度 展示・行事予定

事業計画	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
白山市立博物館 275-8922 原巻水展 ◆講演会等 ◆講座 ◆鉄道模型運行		企画展「梶野玄山 —花鳥山水画の世界—」 4/24～6/21			企画展「北前船の遺産 —白山市に残る夢とロマン—」 7/17～9/22			企画展示 「石川中央都市圏考古資料展」 9/18～11/15	企画展「HAKUSAN City コレクション展 —Part2 白山ろく編—」 10/23～12/20		企画展「くらしと道具のうつりかわり」 1/8～3/14	
		①5/17		②7/19		8/30講演会「北前船」 8/5夏休み工作教室	③9/20	10/25伝統工芸教室 中旬 ミニ新幹線乗車会	11/14・28・12/12古文書講座		3/7刀の手入れ教室	⑤3/21
千代女の里俳句館 276-0819 スポット展示 「千代女の短冊」 3/27～5/17 立夏展示替			企画展「令和の俳句と写真展」 6/13～8/10		スポット展示 「千代女と哥川」 8/1～8/30 立秋展示替		特別展 「千代女の雪月花」 9/12～10/25	俳句協会 会員展 10/31～ 11/15 立冬展示替	千代女・ 一茶交流 パネル展 12/5～ 12/20 新年展示替		俳画の愉しみ展 1/16～3/14 立春展示替	
松任中川一政記念美術館 275-7532 1期「百花撩乱 —薔薇作品を中心に—」 3/3～5/31 4/23ミニコンサート 美術館講座「中川一政文集を読む」			2020特別企画 松任中川一政記念美術館 所蔵全作品公開展 II期「われはでくなり —陶芸作品を中心に—」 6/2～8/30 ①6/13		臨時休館 III期「不転転—人生100年時代を生きた力—」(仮称) 9/5～11/29 7/15～7/26 第26回花を描こう絵画展(市民工房うらわし) 9/5 特別公開展オープニングコンサート ②8/8		IV期「正念場—書を中心に—」 12/1～2/28 11/29 美術館旬会 10/18・19 0歳からの家族鑑賞会「ミュージアムスタート」 ③10/11					2021 春季テーマ展 (内容未定) 3/2～ ⑤2/13
石川ルーツ交流館 278-7111	4/12篠笛コンサート				7/5 山中節を楽しむ会 8月下旬 鉄道模型公開運転会					11/15ヨシ笛コンサート		
呉竹文庫 278-6252 「歌を綴じる」展 2/18～5/31 毎月、第1日曜日 あぐら茶会(1月、10月は休み)					「呉竹文庫夏季展」 6/16～9/27 不定期 文化教室茶会					「呉竹文庫秋冬展」 10/16～2/28		
松任ふるさと館 276-5614	4/19リニューアルオープン				7/4ミニコンサート 7/5七夕茶会・句会 7/4・5「七夕夜灯」		9/26ミニコンサート 9/27月見茶会 9/26・27「月見夜灯」					2/6雪見茶会
鳥越一向一揆歴史館 254-8020 ◆歴史セミナー					企画展 「タイトル未定」 7/18～9/22				企画展示 「石川中央都市圏 考古資料展」 11/20～12/20			

※各館のイベント等は白山ミュージアムポータルサイト <http://www.hakusan-museum.jp/> で紹介しています。日程等が変更になる場合があります。詳細については各館までお問い合わせください。

白山ミュージアム

